平成29年度

慶應義塾大学入学試験問題

文　学　部

地理歴史
（世界史）

注　意　1.　受験番号（2ヶ所）と氏名は，所定欄に必ず記入してください。
受験番号は，所定欄の枠内に一字一字記入してください。

2.　解答は，必ず解答用紙の指定の箇所に記入してください。

3.　解答用紙は，必ず机の上に残しておいてください。

4.　この問題冊子は，表紙を含めて11ページあります。試験開始の合図とともに全てのページが揃っているかどうかを確認してください。ページが抜けていたり，重複していたりする場合には，直ちに監督者に申し出てください。

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I　以下の文章を読み，空欄（　A　）～（　J　）に最も適切な語句を記入し，下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

中央アジアの（　A　）＝ハン国は，14世紀半ば頃，(1)マーワラーアンナフルと呼ばれるアム川からシル川にかけての地域を中心とする西部と，モグーリスタンと呼ばれる草原地帯である東部に分裂した。トルコ化・イスラーム化が進んだ西部では，アミールと呼ばれる各地の部族の統率者たちが覇権争いを繰り広げた。有力アミールの一人であったティムールは，1370年，この抗争を制して新たな政権を樹立した。モンゴルの伝統を尊重し，チンギス家に属する女性を娶（めと）ることで自らの威信を高めたティムールは，アミールたちの抵抗を巧みに退けつつ，モグーリスタンやアム川下流域のホラズム地方に度々遠征した。こうして政権の樹立から約10年間で中央アジアの支配権を握った後，旧モンゴル帝国領の再統一を目指し，大規模な征服活動を開始するのである。

イランとイラクを中心とする地域では，フラグを創始者とするモンゴル政権が14世紀半ばまでに衰退し，その後，大小の諸勢力が分立する状態が続いていた。ティムールは，1380年代以降，これらの勢力を次々と攻略した。この過程で，のちにティムール朝の首都となるアフガニスタン北西部のヘラートを獲得したほか，イラン北西部のタブリーズ，イラン南部のシーラーズ，(2)イラクのバグダードなどの重要都市を手中に収めた。また，14世紀後半のアナトリアとバルカン半島では，オスマン朝がバルカン半島東南部の（　B　）を征服して首都に定め，この都市を拠点に領土の拡張を進めていた。1389年にスルタンとなったバヤジット１世は，コンスタンティノープルを包囲してビザンツ帝国を追い詰め，1396年には（　C　）の戦いでハンガリー王ジギスムントの率いる連合軍を撃破した。この強力なオスマン朝に対しても戦いを挑んだティムールは，1402年にアンカラの近郊でオスマン朝軍に勝利し，バヤジット１世を捕虜とした。

南ロシアの草原地帯では，14世紀後半，チンギス＝ハンの長子ジュチの子孫を君主とする遊牧国家の統一が失われ，ティムールの支援を受けたトクタミシュがその支配権を奪取した。その後，両者の関係が次第に悪化すると，ティムールは北方遠征を敢行してトクタミシュの軍を破り，さらにカスピ海に注ぐ（　D　）川の流域に進軍し，首都サライを破壊した。（　D　）川の中流域では，1438年にモンゴル系のカザン＝ハン国が成立した。また，ティムールは1398年にアフガニスタンを経由して(3)北インドに侵攻し，デリー＝スルタン朝の支配下にあったデリーを占領した。ティムールは間もなくサマルカンドに帰還したが，パンジャーブ地方の統治を委ねられたヒズル＝ハンは，1414年にデリー＝スルタン朝の第４の王朝である（　E　）朝を建てた。

このように各地で大きな戦果をあげたティムールは，中央アジア，アフガニスタン，イラン，イラクに及ぶ大帝国を一代で築きあげた。こうした大帝国の構築には，トルコ・モンゴル系遊牧民の軍事力だけでなく，イラン系定住民のもつ経済力も必要不可欠であった。そのため，ティムールはサマルカンドを始めとする都市の開発や商業の振興にも尽力した。

1405年，ティムールは東方遠征の途中，シル川中流域のオトラルで病死した。その後の混乱を治め，ティムール朝の第３代君主となったシャー＝ルフは，サマルカンドを中心とするマーワラーアンナフルの統治を長子の（　F　）に委ね，以前より自身の拠点であったヘラートに首都を移した。西方では領土の一部を失ったが，明朝との外交関係を修復して友好を保ちつつ，国内ではイスラーム法を尊重し，農業・商業・文化の振興や育成に努めた。そのため，約40年に及ぶシャー＝ルフの治世は，ティムール朝を通じて最も安定した時代となった。

ティムール朝治下のサマルカンドやヘラートでは，イラン＝イスラーム文化の伝統を受け継いだ華やかな都市・宮廷文化が開花した。歴代の君主は，モスクや(4)高等教育施設であるマドラサ，墓廟，庭園，宿泊施設，公衆浴場などの建築事業に熱心に取り組み，自らの威光とイスラームへの敬虔な姿勢を民衆に示した。ティムールは，征服地から多数の職人をサマルカンドに移住させ，巨大なビビ＝ハヌム＝モスクを建設させた。学問・文学・芸術の諸分野も君主らの保護を受けて発展した。優れた学者でもあった（　F　）は，サマルカンドに建設した天文台で天体観測を行い，天文学や暦法の発達に大きな役割を果たした。また，ペルシア語や（　A　）語による文学活動も盛んに行われ，王朝末期のヘラートで活躍した文人ナヴァーイーは，（　A　）語文学の確立に貢献した。

1447年にティムール朝の第４代君主となった（　F　）は，間もなく息子との戦いに敗れて謀殺された。その後，アブー＝サイードが混乱を収拾して権力を掌握したが，この君主が1469年に没すると，ティムール朝はサマルカンド政権とヘラート政権に分裂した。この頃のサマルカンドでは，イスラームの神秘主義教団であるナクシュバンディー教団の指導者が，宗教的な権威や莫大な財産を背景に，政治にも強い影響力を発揮するようになった。サマルカンドとヘラートの両政権は，シャイバーニー＝ハンの率いる遊牧民である（　G　）人の攻撃を受け，1500年と1507年に相次いで滅んだ。以後，中央アジアはシャイバーン朝の支配下に入った。中央アジアの支配を断念したティムール朝の王子バーブルは，アフガニスタン東部の（　H　）を本拠にして北インドへの進出を開始し，1526年にデリーやアグラを占領してムガル朝を創設した。

他方，アンカラの戦いに敗れて崩壊の危機に瀕したオスマン朝は，15世紀半ばまでに復活を果たし，その後もさらなる領土の拡大と支配体制の集権化を進めた。1453年にコンスタンティノープルを征服してビザンツ帝国を滅ぼした後，1475年にクリミア半島を拠点とするクリム＝ハン国を従属させ，さらにアナトリアとバルカン半島の大部分を支配領域に加えた。16世紀に入ると，イランのサファヴィー朝が，キジルバシュと呼ばれるトルコ系遊牧民の支持を得て勢力を伸ばし，アナトリア東部の支配をめぐってオスマン朝と対立するようになった。オスマン朝の第９代スルタンである（　I　）は，1514年にアナトリア東部の（　J　）でサファヴィー朝軍を撃破し，当面の脅威を除くことに成功した。この戦いでオスマン朝の勝利に重要な役割を果たしたのは，(5)イェニチェリ軍団を中核とする強力な常備軍であった。このように，15世紀初頭の危機を克服したオスマン朝は，その後も東地中海世界において着実に拡大と発展を続けたのである。

設問（1）9世紀後半にアッバース朝から事実上独立して下線部（1）の地域を支配し，999年にカラハン朝に滅ぼされたイラン系イスラーム王朝の名称を記しなさい。

設問（2）フラグが下線部（2）の都市を攻略し，アッバース朝を滅ぼしたのは何年であるか，記しなさい。

設問（3）下線部（3）に関連して，11世紀初頭，聖戦の名のもとに北インドへの略奪的な遠征を繰り返したガズナ朝最盛期の君主の名前を記しなさい。

設問（4）下線部（4）に関連して，セルジューク朝の宰相ニザーム＝アルムルクが統治下の主要都市に創設した一連のマドラサを何と呼ぶか，記しなさい。

設問（5）下線部（5）の人員を補充するため，バルカン半島を始めとする征服地のキリスト教徒の男子を強制的に徴用するオスマン朝の徴集制度を何と呼ぶか，記しなさい。

Ⅱ　以下の文章を読み，空欄（　A　）～（　J　）に最も適切な語句を記入し，下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

現在のヨーロッパ西南端に位置しアフリカ大陸に向き合うイベリア半島は，古くから様々な民族の侵入を受けたが，そのおかげで多様な文化をはぐくんできた。この半島には太古の時代から人類が居住しており，1879年には旧石器時代に描かれた（　A　）の洞穴絵画が発見されている。紀元前10世紀頃からは，ケルト人がこの半島に定住するようになり，さらには東地中海の（　B　）人やギリシア人が到来し植民都市を建設した。たとえば，（　B　）人は，現在のカディスに植民都市を建設した。その後，紀元前6世紀頃には，カルタゴがこの地域に進出し，やがてイベリア半島で勢力を拡大した。ローマとのポエニ戦争の際には，この半島のカルタゴ都市も重要な役割を果たした。紀元前218年から始まる第2次ポエニ戦争では，カルタゴの指揮官ハンニバルは，戦象を含む大軍勢をひきつれ「新カルタゴ」と呼ばれていた南東部のカルタヘナを出発し，陸路半島を北上しイタリアへと向かった。最終的に，ハンニバルが拠点としたこの半島は，紀元前206年までに，（　C　）を指揮官とする遠征軍によりほぼ制圧され，ローマの支配下に入り，やがてヒスパニアの諸属州として整備されることとなった。ヒスパニアの各地では，他の地方と同じようにローマ的な都市の建設によりローマ化が進められていった。セゴビアに残る水道橋などに，当時のローマ支配の痕跡を見ることができる。ローマ時代，ヒスパニアは，農業生産地としてのみならず鉱物資源の供給地として重要な役割を果たし，またトラヤヌス，ハドリアヌス，テオドシウスなどこの地にゆかりのある皇帝を輩出し，さらには著名な詩人や哲学者などを生みだした。たとえば，皇帝ネロの助言者をつとめたが，最終的に自殺を強要されたストア派の哲学者（　D　）もヒスパニアのコルドバの生まれである。

キリスト教も，ローマ帝政期初期にはこの地に伝えられ，次第に浸透していった。313年にコンスタンティヌス大帝によりキリスト教が公認され，さらに392年にテオドシウス帝により国教とされると，ローマ帝国は地中海周辺全域におよぶキリスト教帝国の様相をとるが，ヒスパニアもその重要な一部を形成した。しかし，西ローマ消滅の頃から，ゲルマン系の西ゴート人がこの地域のローマ系住民を支配するようになった。彼らは，当初(1)異端であるアリウス派のキリスト教を信奉していたが，6世紀にカトリックのキリスト教に改宗した。6世紀から（　E　）を首都とした西ゴート人の王国では，キリスト教文化が花開き，『語源』を著した（　F　）大司教（　G　）などの教会知識人が現れた。

しかし，7世紀初頭にアラビア半島でイスラームが興ると，地中海世界は一変し，やがてキリスト教勢力圏とイスラーム勢力圏に2分されることになった。632年のムハンマドの死後，イスラーム勢力は周辺領域への征服を開始し，西では北アフリカを制圧し，711年にジブラルタル海峡を渡り，イベリア半島に侵入した。イスラーム勢力は，数年のうちに半島のほとんどの地域を支配するようになり，さらにピレネー山脈を越えて現在のフランス中部まで進出したが，732年のトゥール・ポワティエ間の

戦いでメロヴィング家の宮宰カール＝マルテルにより撃退された。その後756年には，東方でのアッバース朝の成立をうけてこの地に逃れてきたウマイヤ家の一族アブド＝アッラフマーンにより，後ウマイヤ朝がコルドバを首都として樹立された。現在コルドバの司教座聖堂として使用されている建物は，彼の治世に建設が始まった大モスクである。この時代以降，イスラーム勢力の支配下でもキリスト教徒やユダヤ教徒の存在も許されていたが，北部を除くイベリア半島の大部分はイスラームの勢力圏となった。叙事詩（　H　）は，この時代のフランク王の対イスラーム戦役とロンセスヴァリェスでのブルターニュ辺境伯の悲劇的敗死を想定して歌われたものである。

11・12世紀頃になると，西ヨーロッパ・カトリック世界は，人口も増加し政治的・経済的にも力をつけ，周辺領域へと進出・拡大していくようになった。この時期に始まる(2)十字軍やドイツの東方植民などの運動は，その例である。イベリア半島に関しては，北部の諸国がこれまでもかろうじてカトリック・キリスト教圏にとどまっていたが，とりわけこの時期以降勢力を拡大していくことになる。その結果北部での政情がより安定し，ますます多くの巡礼者がピレネー山脈のかなたから巡礼の道を通り，半島北西部の（　I　）へと向かうようになった。（　I　）に祭られる聖人は，イスラーム勢力に対する戦争においてキリスト教徒の守護聖人とみなされるようになっていた。1085年には（　E　）がキリスト教王国により征服されたが，その地は，その歴史的経緯からキリスト教徒，ユダヤ教徒，イスラーム教徒が共存し，古典古代やイスラームの学問を研究・翻訳する中心地のひとつとして栄え，西ヨーロッパ中から多くの学者をひきつけ(3)「十二世紀ルネサンス」の知的運動の一翼をになった。

11世紀以降，イスラーム勢力圏では，後ウマイヤ朝の権威が衰退し，群小諸王国の時代を迎えるが，北部のキリスト教諸王国は，これに呼応するかのように徐々に拡大・発展していき，13世紀前半までにカスティリャ，(4)アラゴン，ポルトガルの３王国が主導権を握るようになった。この後の「レコンキスタ」を主導したのは，この中でもとりわけカスティリャとアラゴンであった。イスラーム勢力圏は，一時期新たに侵入したムワッヒド朝により再統合されるかに思われたが，1212年にムワッヒド朝のイスラーム軍がラス＝ナバス＝デ＝トローサでキリスト教諸王国の連合軍に大敗を喫すると，その後「レコンキスタ」は大きく進展することとなった。1236年にはグアダルキビル川沿いのコルドバが，1248年にはその下流にある（　F　）が陥落した。（　F　）には12世紀にムワッヒド朝により建設された大モスクが存在したが，そのミナレットは現在も大司教座聖堂の鐘楼ヒラルダの塔として残存している。13世紀後半以降残ったイスラームの主要勢力は，最南部のナスル朝のみとなるが，この王朝はカスティリャに臣従することにより15世紀まで存続した。

「レコンキスタ」は，14世紀の間一時停滞するが，15世紀に再び大きく進展した。1469年にカスティリャの王女イサベルと後のアラゴン王フェルナンドが結婚し，1479年に「スペイン王国」が成立した。1492年，この両王によりナスル朝が滅ぼされ，「レコンキスタ」は完了した。ナスル朝がその首都（　J　）に建築した壮麗な宮殿は，イベリア半島におけるイスラーム文化最後の輝きを現在まで

伝えている。「レコンキスタ」を成し遂げた両王は，今も（　J　）の大司教座聖堂に葬られている。（　J　）が陥落した1492年は，まさに，両王の庇護を受けた(5)コロンブスが半島南端の港町パロスを出帆した年だった。多様な民族・宗教・文化が織りなしてきたイベリア半島の歴史は，ある意味，象徴的にこの年に大きな転換点を迎えたと言えるであろう。

設問（1）下線部（1）のアリウス派の他にも，5世紀には正統教義に反するものとして，ネストリウス派と単性論派が異端とされた。この時単性論派を異端と決定した公会議の名称を答えなさい。

設問（2）下線部（2）に関して，1187年に十字軍支配下のイェルサレムがサラーフ＝アッディーンの攻撃により陥落したことをうけて，第3回十字軍が組織され，神聖ローマ皇帝をはじめフランス王やイングランド王がこの十字軍に参加した。この十字軍に参加したイングランド王の名前を答えなさい。

設問（3）下線部（3）の時代に先進的なゴシック様式に改築され，やがてフランス王家の中心的墓所となるパリ郊外の修道院（聖堂）の名称を答えなさい。

設問（4）1282年に地中海のある島でフランス王家の傍系アンジュー家支配に対する民衆反乱が勃発した後，下線部（4）の王国はこの島の領有権を求めて戦争を行い財政悪化を招き，王権の議会への依存を強めることになった。この島の名称を答えなさい。

設問（5）下線部（5）に関連して，コロンブスは，天文地理学者トスカネリの地球球体説の影響を受け，大西洋を横断する西回り航路でアジアに直接到達できると信じて出港したが，意に反してカリブ海に到達した。コロンブスが最初に到達し，自ら命名した島の名称を答えなさい。

Ⅲ　以下の文章を読み，空欄（　A　）～（　J　）に最も適切な語句を記入しなさい。

16世紀以降，アラブ地域は長きにわたりオスマン朝の領土となっていたが，第一次世界大戦が始まると，オスマン朝からの分離独立を目指す気運が急速に高まりを見せた。そうした中，預言者ムハンマドの出身家系である名門（　A　）家の一員であり，アラブ独立運動の指導者でもあったフセインはイギリスとの間に交わしたフセイン・マクマホン協定に基づき，1916年にオスマン朝に対して反旗をひるがえした。フセイン自身は自らの拠点であるイスラームの聖地メッカにとどまったが，反乱軍を率いた彼の息子（　B　）は1918年にダマスクスを占領し，そこを拠点に将来の独立国家建設に向けた準備を進めた。しかし，大戦中にイギリスが秘密裏にフランスおよびロシアと交わしたサイクス・ピコ協定では，オスマン朝の領土となっていたアラブ地域のうちイラクとパレスチナはイギリスの，ダマスクスを中心とするシリア地方はフランスの支配下に置かれることになっていた。1920年のサン＝レモ会議において，国際連盟の要請に基づく委任統治として英仏によるアラブ地域の帝国主義的分割が正式決定されると，シリアのアラブ独立派は激しく反発し，同年シリアの独立を宣言した。しかし，フランスはもちろんのこと，フセイン・マクマホン協定にてアラブ人国家建設を認めたはずのイギリスもこの独立宣言を承認しなかった。孤立無援の（　B　）はフランスによりシリアから追放され，シリアは予定通りフランスの委任統治領となった。なおこの後，フランスは委任統治領シリアからレバノンを分離させ，シリアとは別個の委任統治領とした。

アラビア半島に目を向けると，1916年にフセイン自身がアラビア半島西岸に建国した（　C　）王国は，その後イブン＝サウードにより併合された。イブン＝サウードはアラビア半島をほぼ統一し，1932年サウジアラビア王国を建国することになる。このほか，アラビア半島の西南端部では，1918年にシーア派の一派ザイド派がイエメンの独立を達成していた。

一方，イギリスはイラクに（　B　）を国王とする王国を成立させたほか，当初は委任統治領パレスチナの一部であったトランスヨルダンを分離させ，パレスチナとは別個の委任統治領とした。イラクとトランスヨルダンにおけるイギリスの委任統治が比較的安定して推移したのに対して，パレスチナにおける委任統治は困難を極めた。当時のパレスチナではヨーロッパから移住してきたユダヤ人と，アラブ系ムスリムをはじめとする現地の人びととの間で対立が深刻化していた。ユダヤ人移民増加の背景としては，19世紀後半以降ロシアにおいて激化した（　D　）のようなヨーロッパにおける反ユダヤ主義の動きや，ユダヤ人の国家建設を目指す（　E　）運動などに加え，パレスチナにおけるユダヤ人国家の建設にイギリスが同意したバルフォア宣言の影響が指摘できる。両者の対立の激化は，最終的にイギリスに委任統治の継続を断念させ，その後のイスラエルの建国と第１次中東戦争を経て，大量のパレスチナ難民を生み出すにいたる。

パレスチナと境を接するエジプトでは，19世紀前半に（　F　）の地位にあったムハンマド＝アリーが２度にわたりオスマン朝と戦火を交えた結果，（　F　）の世襲権を獲得し，自立化の傾向を

著しく強めた。しかし，その後はスエズ運河の建設など大規模な公共事業の実施が財政を圧迫し，イギリスなどの介入を招くことになった。1882年，エジプト民族運動の原点と言われるウラービーの反乱を鎮圧した後，イギリスはエジプトを占領下に置き，さらに第一次世界大戦の開戦後は正式に保護国とし，戦後の独立をちらつかせて戦時体制への協力を強いた。終戦後，（　G　）党を中心に独立運動が高まりを見せると，イギリスは1922年にエジプトを独立させ，エジプト王国が成立した。しかし，イギリスはスエズ運河地帯駐屯権をはじめとする種々の特権を留保しており，それは完全な独立と呼べるものではなかった。そのため，その後のエジプトの民族運動にとり，イギリスからの完全独立の達成が喫緊の課題となった。1936年に結ばれた（　H　）条約は，エジプトの主権がおよぶ範囲をさらに拡大するものであり，完全独立の実現に向けて大きく前進したものの，依然スエズ運河地帯におけるイギリス軍の駐留継続が認められていた。第１次中東戦争での敗北後，エジプト軍内に組織された（　I　）が1952年にクーデターにより王政を打倒すると，（　I　）の中心人物であったナセルは交渉の末，イギリス軍をスエズ運河地帯より撤退させることでイギリスと合意した。さらに，1956年にナセルが（　J　）の建設資金を調達するためにスエズ運河を国有化すると，運河の再支配をもくろむイギリスはフランスおよびイスラエルとともにエジプトに侵攻し，スエズ戦争（第２次中東戦争）が起きた。アメリカをはじめとする国際社会を味方につけたナセルは早期に停戦へと持ち込むことに成功し，長年にわたるイギリスのスエズ運河支配は遂に終焉を迎えたのだった。

Ⅳ　以下の文章を読み，空欄（　A　）～（　J　）に最も適切な語句を記入しなさい。

「ハプスブルク帝国」とは，ハプスブルク家が統治した多様な国の総体を示す歴史学上の呼称である。その後継国家のオーストリアは，ナチス・ドイツの最初の被侵略国であり1955年以降の永世中立国というイメージが先行しているが，この帝国の歴史は東南欧への拡大の歴史であった。

ハプスブルク家はスイスのライン川上流域の小領地から西南ドイツに所領を拡大して，1273年に同家のルドルフが神聖ローマ帝国のドイツ王に選出されてからオーストリア公国を手に入れた。1526年に初めてベーメン王国と「ハンガリー王国」を世襲領に編入すると，オーストリア系ハプスブルク家の支配領域は，神聖ローマ帝国内外に拡大した。オスマン帝国の勢力後退が決定的となった1699年の（　A　）条約以降，さらに東方へと領域を拡大することになる。

1713年にカール６世は，ハプスブルク家内諸領邦との交渉により，世襲領の不可分の原則および女性の相続を可能にする国事詔書を承認させ，1740年にその子でロートリンゲン公と結婚していたマリア＝テレジアが広大なハプスブルク家世襲領を継いだ。しかし，プロイセン王フリードリヒ２世は父の認めた国事詔書の効力に疑義を唱え，同じくそれに不服だったバイエルン・ザクセンにスペイン・フランスが加わり，オーストリア継承戦争が起きた。1748年の（　B　）の和約ではプロイセンにシュレジエンが割譲されるが，マリア＝テレジアのハプスブルク家世襲領の継承権は認められ，国事詔書は1918年の君主国崩壊まで効力を持ち続けることになる。その後，シュレジエンの奪還を目指したハプスブルク家は，カール５世とヴァロワ家の（　C　）との間に生じた皇帝選挙をめぐる争い以来，長らく続いてきた国際的な対立関係を劇的に転換させたものの，イギリスの財政的援助を受けたプロイセンに決定的勝利を収めることはなかった。

そもそも，1804年までハプスブルク家の支配領域全体について公式の名称はなかった。この年，ナポレオンによって神聖ローマ帝国が消滅すると，残ったハプスブルク家の支配する国が1867年まで「オーストリア帝国」を正式の国家名称とした。この年，オーストリアが外交上の失敗に媒介されてハンガリーとの（　D　）により立憲制の二重制へと移行し「オーストリア＝ハンガリー帝国」となる。バルカンではセルビアが独立を宣言した。オーストリアが盟主だったドイツ連邦から除外され，ハプスブルク家の統治する地域が国家としてまとまりを得た翌年であった。

プロイセンを中心にドイツ帝国が成立すると，ハプスブルク家を君主とする地域が国家としての一体性を確立していくプロセスとともに，オーストリアのバルカンへの拡張政策が強化された。1875年にボスニア・ヘルツェゴヴィナでオスマン帝国の地域行政に対する住民の反乱が起きたことから，オーストリアは1876年，ロシアとバルカンにおける両国の勢力範囲を取り決める密約を交わした。オーストリアの合意を得たロシアは1877年，ギリシア正教徒の保護を口実に露土戦争を起こして，翌年（　E　）条約が締結された。その結果，ロシアは領土を拡大し，セルビア・（　F　）・ルーマニアは独立した。またブルガリアは領域をエーゲ海沿岸まで拡大し，自治を認められてロシアの保護下に

おかれた。しかし，オーストリアとイギリスは，ブルガリアを利用したロシアのエーゲ海進出を阻止する目的で干渉し,「誠実なる仲買人」を自称したドイツ宰相ビスマルクが（　G　）会議を開催した。その場で（　E　）条約は破棄され，マケドニアを含んでいたブルガリアの領土はバルカン山脈以北へと縮小された。セルビア・（　F　）も独立は国際的承認を受けたが，獲得領地を大幅に返還することになる。バルカンにスラブ系の大国を作らせないことが密約で合意されていたためである。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは，イギリスの提案により，そしてロシアとの合意のとおり，オーストリア＝ハンガリーが占領して共同管理下においた。占領下２州の正教徒住民はむしろセルビアとの合併を望んでいたため，オーストリアはムスリム系住民を支配に多用することになる。

イギリスのバルカン政策の主目的は長い間ロシアに対するオスマン帝国の領土保全にあった。しかし，ロシア・フランスが中東および極東でイギリスと対立するような植民地政策をとり，皇帝ヴィルヘルム２世も世界政策を開始すると，イギリスにとって，黒海と地中海を結ぶ（　H　）両海峡問題の重要性は減少した。ビスマルクの仲介に応じてイギリスが1895年に結んだ「地中海協商」は期限切れを迎え，オーストリアが対ロシア政策においてイギリスの力を借りる道は閉ざされることになる。

1908年にはオーストリアがボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合する。ハプスブルク皇帝は「併合」が文明と繁栄への道であることを力説しながらこれを正当化した。ロシアは（　H　）両海峡問題と引き換えにこの併合を支持していたが，今度はイギリスがボスニア問題をめぐる国際会議の開催を要求した。しかしドイツの支援を得たオーストリアがそれを拒絶し，さらにオーストリアの支援を得たブルガリアが完全に独立した。その翌年，オーストリアはセルビアに対する予防戦争をめぐる最後通牒を突きつけることに関してもドイツから同意を獲得した。

1912年に（　I　）がオスマン帝国領のトリポリ・キレナイカを奪って植民地とすると，ロシア主導で結成されたバルカン同盟がオスマン帝国に宣戦して，イスタンブルを除くヨーロッパ領とクレタ島を得た。その際，オーストリアはセルビアがアドリア海への出口を得ることのないよう（　J　）の独立を強硬に推し進めることになる。その後，ブルガリアの得た領土が過大であるとして，周辺諸国が攻撃を仕掛けた第２次バルカン戦争が生じた。

バルカンの情勢が流動化していた1914年６月28日，オーストリア帝位継承者のフランツ＝フェルディナント夫妻がボスニアの首都サライェヴォでセルビア系住民に暗殺された。この日は1389年のコソヴォの戦いにおいてセルビアがオスマン帝国軍に敗れた記念の日にあたった。ハプスブルク帝国は，国民国家による帝国主義的な国際関係のなかで，自国内に「周縁」を作り出すことで自らの危機を克服しようとしたが，それが帝国の構造への脅威となっていくのである。